福井市グリフィス記念館講座　　“ **神仏の国のグリフィス** ”　　2021/3

1　宗教者としての W.E.グリフィス

福井藩校教師として約一年、その後東京の官立洋学校教師として二年半、日本に滞在したグリフィスは帰国二年後の 1877（明治十）年、ニューヨーク州スケネクタディで念願の牧師職に就いた。以後四半世紀にわたり聖職者人生を歩んだ彼だが、その道へと第一歩を踏み出した日のことが、彼の自伝的文章に記されている。

《One day, however, early in 1864, the voice of conscience, or the call of god came to me very distinctly. Indeed, it seemed almost with the suddenness and clearness of a lightning flash, that the path of duty was made plain. I was to study for the ministry and preach the gospel. Instantly, and for many days, I made resistance・・After some weeks of futile resistance, I obeyed the call.》　　*Sunny memories of three pastrates* より

小さい頃からグリフィスは信仰心のあつい母親の影響で教会に通っていたものの、牧師になろうという気はなく、二十歳の頃には職人として働いていた。そんな彼に突然、自分の内側から神の声が静かに、でもはっきり聞こえる、という経験がおとずれたのだという。彼は数週間、その声に抵抗したものの、ついには自分の人生は人々に福音を説くことにあると決心したらしい。グリフィスはラトガース大学で牧師として必要な教養をみにつけた上で、神学校へ進学するという道を歩みはじめる。

人類の真の救いは神によってのみなされる、という信仰への目覚め。こうした劇的な回心は revival と呼ばれ、社会現象としては一般に「信仰復興」と和訳される。十九世紀の米国においては、特別神がかりな体験談ではない。

「カレッジ生活において本当に効果的な宗教の触媒になったのは、信仰復興であった。それは、多くの若いカレッジの学生たちを教会に向かわせ、牧師への道を歩ませたほとんど説明不可能な懺悔、信仰告白、喜悦、および落涙の結合体であった。この時代のカレッジの学長や教授陣の大半は、カレッジ在学中の四年間に熱烈な信仰復興が起こらなかったら、彼らが -もしくは神が- カレッジでの育成に失敗したことになると感じていた」。「信仰復興は、祈りの日によって、あるいは劇的な効果的な説教によって、あるいは人気のある学生の悲劇的な突然死によって、発火した。・・アマーストでは、1823 年から 1870 年までの間、少なくとも四年ごとに信仰復興があった。」

F.ルドルフ『アメリカ大学史』阿部美哉・温子訳

文中の下線は、日下部太郎の葬儀を想起せざるを得なかった引用者による。「越前福井藩日下部太郎と申候人此四月十三日に死去す。・・葬式等者翌々日取行ひ申候。可感事には日下部の病中日々当所の教師等又は其妻等来り訪ひ、死するに及ては其の哭する恰も親族に於けるが如し。又之が為に学校の稽古相止め教師を始め諸生等悉く葬を送り三十日の間喪の印を着け、更に彼我の別あるを見ず。却て私共愧候事不少・・」(『楳渓津田先生伝纂』より)。現地に着いて間もなかった熊本藩留学生津田亀太郎が、手紙で彼の父親に驚きを伝えた光景にこそ、当時のラトガースという学び舎の本質があった。「ある時代には、朝と夕の祈りと日曜日の会堂礼拝の強制は、アメリカのカレッジ体験の基本であった」(ルドルフ前掲書)。その時代のキャンパスでグリフィスと日下部は出会っ

た。グリフィスの revival に日下部の死は必要なかった。彼の回心は入学後教師に導かれての集団的経験ではなく、すでに彼を入学させた契機としてあった。グリフィスが回心したのは 1864 年。内戦の最中だった。前年彼も出征した。国の争いに若い魂が揺さぶられた結果であろうか。

1865 年、グリフィスは 22 歳でラトガース大学に入り、在学中は校内誌 Targum などで積極的に活動した（物書きの性分をすでに発揮している）。卒業後、神学校で学んでいた時（日下部死去の半年後）東京在住の宣教師から、教師としての適任者を求める福井藩のため本国に照会がなされた。（当時はまだ禁教期だが、宣教師 G.フルベッキが中央政府の陰の顧問格であり、官立洋学校の運営を任されていた）。この時代、フルベッキの教会 Dutch Reformed Church とラトガースは一体とみてよい。大学の判断で選ばれたのが、27 歳の見習い牧師グリフィスだった。すなわち、回心なくしてグリフィスはラトガースに通わず、日下部に出会わず、日本に行くこともなく、『皇国』を書くこともなかった。

『皇国』*The Mikado's Empire* は、グリフィスが日本から帰国して神学校在学中に出版し、彼の生涯の代表的著作となった日本史書である。彼の生前、日本に関心をもつ西洋の知識人の書棚に常に見られたという本であり、日米関係のために尽くした渋沢栄一も、我が国の歴史を学ぶ上で参照すべきと講話で推奨している。この書を理解する上で重要な鍵となるのは、彼の宗教心である。

2　神仏の国の明治維新　～信仰～

「日本にいる間、私は日蓮ゆかりの地として広く知られる場所を訪ねようと足を延ばした」。「私が判断できる限り、日本の宗教的知性にこれほど深く自らの痕跡を残した現地の神学者は、日蓮を措いて他に無い」。なぜグリフィスはそう判断するのか。「その時代、日蓮が開いたそれは、日本における仏教の第二のリヴァイヴァルと呼びうる。十三世紀の開幕において、すでに受け身の静けさの段階に達していた偉大な宗教は、それが不純な淀みと冷たい形式主義を免れるために必要な、改宗の精神を注入されたからである」。「日蓮の成功は熱情と頑迷の時代を開いたとはいえ、国民の宗教的生活の最良の見本となる活力において、生気を呼び覚ました。我々が仏教を偽りの宗教と呼ぶか真正のものとするかに関わらず、どれほど日本人について学ぶことの浅い者であっても、日本の民衆の純粋に宗教的な性質、同じぐらい迷信的ではあるが、その性質を育て発展させたものとして、仏教ほど大きく影響した力は他に一つもないことを、承認するに違いない」。

　グリフィスは滞日中、庶民のお祭りに好んで出かけた。彼は民間習俗への関心が非常に強かった。古い祠に、古い屋敷の仏間に、仏寺の群衆に、法華のお題目に（うるさいと思いながらも）、彼は感動する心をもっていた。十九世紀の異教徒の光景に彼が感動したのは、日本の庶民の内にひからびていない本当の宗教心の所在をみてとったからである。キリスト教よりはるかに古く、日本に渡ってからでも千年を経た宗教が、なぜ活力を保ち得ているのか。それは日本仏教の歴史において、偉大な信仰復興者がいたから

だ。彼はそう理解し、日蓮の激しさにこそ宗教者のあるべき姿を見た。

グリフィスが日蓮宗以上に共感を寄せた仏教宗派が浄土真宗である。僧が妻帯しない当時の日本にあって、真宗はまさに異端だった。妻を持ち、家族と共に、俗世を離れず、社会の中で敬虔に生きる。グリフィスはその姿に、自らのキリスト教、すなわちプロテスタントに通ずる信仰をみた。異端視と抑圧に屈することなく、信徒が仏の教えに直接向き合う。そのため男女の教育を重視する。グリフィスは深い共感から、真宗を「日本仏教のプロテスタント」と表現することをためらわなかった。(「グリフィスが語る日本仏教」 p 14～16 参照)

・

だが、当時は真宗のみならず、仏教全体が大いなる受難に見舞われた直後だった。国難に敏感な諸侯が、弾圧を先導した。水戸烈公は火葬を禁じ、梵鐘仏具を没収した。薩摩藩では島津斉彬の廃仏政策が次代に継承され、明治には菩提寺さえ廃寺の対象とした。鹿児島県下のお寺は幕末の 1066 寺、僧 2964 という数が明治七年にはゼロになったという（鵜飼秀徳『仏教抹殺』)。単なる戦時中の金属供出ではない。何があったのか。

当時の“意識の高い”武士の意識は『明六雑誌』に見える。以下は津田真道論文より。「はたして闔国の人民は依然たる旧習の人にして、概してこれを言えば、地獄極楽、因果応報、五行方位など、無根の説に迷える愚民なり」。グリフィスは庶民の信仰に感動したが、日本の武士は庶民の宗教心を見下していた。武士の学問は儒学だった。いのち

をつなぐための現実政治への関心の中に、死後の霊魂の救済はあまり居場所がなかったのだろう。庶民の信仰と武士の意識の間の落差を知らずに、廃仏政策は理解し難い。

水戸学のバイブル『新論』において仏教は「神明の邦を変じて、以て身毒（インド）の国」となすものと誹謗される。「天地の間に二つとなく、尊くましますの天皇をいただき奉りながら」「儒者などの心に、もろこしの国にまさりて尊き国なく」と憤ったのは本居宣長だが、儒学の隆盛が国学を興隆させ、両者の尊王論あいまって維新を引き起こしたことをグリフィスは『皇国』最終章で解説している。意識の高い武士たちにより、日本は世界一尊い「神の国」、天皇は世界一尊い君主と認識され、これが安全保障意識と結合し、外来宗教は愚民を惑わす国盗りの罠として、彼らからむやみに敵視された。

明治初年の廃仏毀釈は、神仏習合を否定し、神社と寺院を分離する神仏判然令を革命政府が下達した状況での暴走行為である。政府にとってはアナーキーの方が問題であり、暴走はやがておさまったが、「判然」は残った。お寺はお寺、神社は神社。仏は仏、神は神。明治以前の「寺社」「神仏」のありようは失われた。それには長い歴史的経緯があろうが、ミカドこそ唯一の君主（ショーグンではなく、諸侯でもなく。幕府は日本政府ではない）と「判然」たらしめようとした革命家の精神にはふさわしかった。

仏教までが外来宗教として弾圧されている国に来てしまった我が見習い牧師はといえば、滞日中特に危ない目にはあっていない。あったら国際問題である。この国際問題こそ、維新期の武士たちの宗教政策に穏当な着地点を強請した事情だった。

3　神仏の国の明治維新　～政治～

国際社会の一員としての日本が、いつまでもキリシタン御法度の高札を掲げているわけにもいかない。キリスト教が歴然と敵視されている国において、指導者自身も愚民を惑わし国を掠めるものと警戒している宗教を、現実政治の上からは公認せねばならない。議論の落としどころ如何。再び『明六雑誌』を見る。森有礼が寄稿した国際法学者の論説曰く「宗教の世交に関る、至て大なり。国の主宰たる者は、ことごとくこれを監察し、またその教師を管理するの権利を有せざるべからず」。「宗教は外顕に関ることのほかは、決して政府の事務にあらず。中心の宗教は各人自己の事務なり。世交を妨げ乱るにあらざれば、誰もこれを制し、かつ罰することを得べからず」。西洋諸国も散々宗教戦争を経験した。主権国家による外的秩序の維持は国際的に当然認められるのであり、宗教心は（キリスト教も含め）内心の自由として保障するのが文明国である。・・政治は国民の心の中まで手を突っ込めないという真っ当な結論だが、そこまで愚民の心を信用している指導者たちではない。高札をおそるおそる撤去してキリスト教を黙認し始めた明治六年（1873 年. グリフィスは東京在住)、一人の僧侶が政府に建白書を出した。

真宗の僧侶島地黙雷が視察中の欧州から、先に帰国する由利公正に託した建言の趣旨はシンプルである。政治と宗教の領分は別だ、と。当時、教導職という官職が置かれていた。任命されたのは神官と僧侶で、庶民に日本国民としての心構えを説く仕事を、共同で仲良くやれというのだ。判然令の経緯を思えば、この無神経な組織がどのみち長く

持つはずもなかったが（1872 年から 1875 年まで存続した）、仏教が社会的に復権したのは確かであり、島地はさっさと引導を渡すつもりで、こう述べた。

・・教導職は政治の仕事をしている。教導職が説く教則三条の中身は、1.「敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事」2.「天理人道ヲ明ニスヘキ事」3.「皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事」。これらは、冒頭の敬神以外は政治の話であろう。宗教者が行うべきは宗教の仕事であり、キリスト教に対抗するという仕事がそれであって、教導職などもう止めにして、宗教の仕事をこそ宗教者（仏教、特に真宗）に任せてもらいたい、という話である。（以上、島地黙雷については山口輝臣氏の著書から）　政府（だいたい士族であり、儒学の徒）は政治（国民教育）を行い、宗教者は宗教の仕事（霊魂の救済）をになう。政府が手を突っ込めない国民の心の領域を担当する国家的大任を自負することで、仏教は新時代における居場所を見出した。

徳川時代の生計基盤だった不動産を奪われた寺社にとって、人々の宗教心だけが支えである。そうなると俗世にあって信者を増やす浄土真宗は強い。廃仏の荒野から寺院を復興させる主力となったのは、やはり彼らだった。だが新時代の国民に仏教の信仰復興は広く見られたであろうか？ 維新の指導者が危惧し、グリフィスが待ち望んだ、キリスト教の日本におけるリヴァイヴァルは？ その前に確認しておきたい。仏教から「判然」と分かたれた神道の方を、グリフィスはどう見ていたのだろうか。

4　グリフィスたち在日外国人の神道観

「神道は、我々が理解するところの宗教というものの特質を、ほとんど持ち合わせていない」。そう述べるグリフィスだけでなく、当時来日した西洋人の多くにとって神道は、宗教として扱うには違和感がありすぎた。(『皇国』における引用。「言葉のもつ厳密な意味において、神道とは宗教ではない」S.R.ブラウン）なぜか。再びグリフィスの言。「神道は道徳律を持たない。倫理・信仰を厳密に定義した体系も持たない。」

人々を善に導く要素として当然あってしかるべきと認識され、実際キリスト教や仏教が具備している要件を、神道は欠いた。本居宣長曰く「まことの理といふものは、はなはだ霊異しく妙なる物にして、さらに人の小き智をもて測識べきところにあらず」「漢国のならひとして・・おのが心をもてよろづを思ひはかりて、かくあるべき理ぞ、かくはあるまじき理ぞと定めて、その己が定めたるところを理の至極と思ひ」(『鉗狂人』より)・・小賢しい理法に価値をみない惟神の道が、世界のあらゆる民族に理法を説き義に導く宗教の信者からは、文明の基礎ではなく未開人の土着信仰とみられたのは無理もなかったとはいえ、当時の特殊な状況が彼らの認識に大いにあずかっていそうなことは、『皇国』に引用された英国公使 H.パークスの言にうかがえる。「概して日本人は、神道とは何なのかについて述べようとすると、困ってしまう。だが、そうなる事情は明瞭だ。それが、かつては土着の信仰としてあったものが、後の世において政治の道具に転化させられたものであったとしたならば」。「神道がかつて偉大な結果を生じたとか、日本の

民を深くとらえたものだったとかしたならば、これほど完全に仏教に取って代わられてしまうことなど、まずなかったであろう」。

確かに維新において神道は政治の道具であった。グリフィスはさらに森有礼の言を引く。「（神道の）政治的利用についていえば、日本に絶対政権を存立させるために国家がそれを助力の勘定に入れることは、全く正しいことだ」。だが多くの日本人が神道について外国人に説明しかねたのは、仏教に取り込まれて独自の体系化が進まなかった事情以上に、理路整然と教理を説くことに神道の本質からの乖離を彼らが感じたからではなかったか。神道は仏教に取り込まれながらも、千年後に“判然”と分離され、その百五十年後においてなお日本人に、畏るべき世界におく身の慎みを伝え続けるだけの生命力を宿していた。だが神道が宗教の範疇から外されることは、森たち維新国家の設計者にとっては、決して不都合な事態ではなかった。

新日本は国民の内心の信仰を認めねばならない。仏教であれ、キリスト教であれ。だが新日本の基軸は天皇であり、その祖宗たる“神”の国という歴史である。もはや皇居に仏壇の影はない。天皇の国家祭祀は不可侵であらねばならない。ずっと不可侵でありえるだろう。国民の信仰が何であれ、天皇の祭祀すなわち神道は宗教ではないのだから。国民は異国の神を信じてもいいが、いかなる神を信じようが、彼らは日本人として日本の神に敬意を示し、天皇が治める神の国という体制を、国家の政治秩序として護持するのだから。禁教の高札は日本橋から静かに姿を消し、宣教の時代が開かれた。

5　その後の日本とグリフィス

グリフィスは齢六十で著した前掲の自伝的文章（1903）の中で、明治日本においてプロテスタント諸派がばらばらに競争する現状を憂えている。異教徒である日本人にキリスト信仰の核心を伝えるためには、小異は措いて一致して布教すべきだと。彼は内村鑑三（1861－1930.　1888 米国留学から帰国）の著作を読んでいただろう。1895 年出版の *How I became a Christian* において内村は述べる。「アメリカは教派の国であり、そこでは、各教派は他を犠牲にして自分たちの人数の増加をはかっています。・・力ない異教の改宗者は、どれを自分のものとしたらよいのか迷ってしまいます」(岩波文庫『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』鈴木範久訳)。

内村といえば教育勅語奉読式不敬事件（1891）があまりに有名であり、ミカドの新日本においてキリスト教がどれほど攻撃されやすかったかを知るに足る。内村は君主を神の如く拝することをためらったが、非国民を責める側にまわる外来宗教（仏教）が得られる立ち位置を考えれば、彼が受けた攻撃のためらいの無さも理解できる。だが内村は前掲書において、キリスト伝道者として来日する外国人の姿勢の方にも大きな問題があることを指摘している。「私たちのもとに来るときには、高い良識をもって来て下さい。・・私たちはカミなき科学を軽蔑しますが、それ以上に科学なき福音の宣教には価値を置きません。信仰は良識とまったく両立しうるものと信じています。熱心にして成功せる宣教師は、すべてこの良識の豊かな持主でありました」。

明治の指導者たちにとっては、むしろ科学こそ福音だった。彼らがフルベッキやグリフィスのようなキリスト教徒、宣教師に国を担う人材の養成を託したのは、良識あるお雇いたちは現地での信頼を得るために、彼らの福音の伝道よりも、現地人が餓えるごとくに求めている新知識を伝えることを優先すると知っていたからだ。再び『明六雑誌』に、明治知識人の文明開化へのヴィジョンを確認する。

「(西洋人は）識高く、学博し。あに木石虫獣を拝する者あらんや。わが邦はすなわち否ず。愚夫愚婦の邪教に沈溺、惑乱する、言うに堪えざるものあり」(柏原孝章)。

「たとえば人の狐を信じ、蛇を信じ、天狗を信ずるがごとき、いやしくも禽獣の学を攻むれば、その妄すなわち著わる。雷電風雨の神を信ずるがごとき、電気の学、晴雨の学に通ずれば、その疑いすなわち釈す。血の池剣の山を信ずるがごとき、地質の学に通ずれば、その信おのずから熄む。・・また何ぞ力圧をもって民信を強ゆる」(西周)。

近代国家の指導者たちは国民の信仰に直接手出しできないとはいえ、彼ら政治の領分の方に島地黙雷が切り分けた仕事、すなわち世俗の文明教育こそ、新日本を担う世代の心をあるべき方向に導く強力な装置たりえた。社会の発展、国の興隆に必須の要件として、グリフィスも「理化学教師」として福井および東京で仕事に勤しんだ。彼は自分の生徒たちを真の福音へ導くため、共に聖書を読む時間を持つことも忘れなかったが、政治指導者にとってそれは彼らが“お目こぼし”している私的修身課程に過ぎなかった。彼らは確かに「地獄極楽、因果応報など無根の説に迷える愚民」を減らすことに成功した

のだろう。だが、問題は残った。「もっぱら智識開達のみに偏重、道徳の一辺に至ては漠然として顧みる所無く、其の根本に培はずして其の枝葉に務め」(1884 年、新島襄の学校教育批判)。すでに明治の半ばにおいて、クリスチャンは国の現状をかく憂えたが、やがて同じ憂いを覚えた政府の修身観は教育勅語として現れた。そこに示されたように基本的に「東洋道徳、西洋藝術」に回帰し続ける近代日本のありようを考える上で、参考になるのはやはり宣教者の不見識こそを問う内村たちクリスチャンの言葉である。

・

再び内村前掲書より。「私たちはキリスト教として、アメリカ教やイギリス教が押しつけられることを好みません」。「我が国の道徳的あるいは社会的欠点については、常にアメリカやヨーロッパと比較されては、そことは違うといわれてきました。・・我が国が消えてなくなったとしても、世界はこれ以上悪くならないだろうと心から信じもしました。・・しかし、遠く離れた流浪の地（米国）から眺めるとき、我が国は「ろくでもないもの」ではなくなりました。それは、目をみはるほど美しく見えはじめました」。「最もすぐれたキリスト教の改宗者は、仏教とか儒教の精髄を決して捨ててはいません」。

新渡戸稲造は *Bushido* (1900)において断言する。「王政復古の暴風と国民的維新の旋風との中を我が国船の舵取りし大政治家たちは武士道以外何らの道徳的教訓を知らざりし人々であった。・・今日までのところキリスト教伝道が新日本の性格形成上貢献したるところはほとんど見られない。否、善かれ悪しかれ吾人を動かしたものは純粋無雑

の武士道であった」。「劣等国と見下されることを忍びえずとする名誉の感覚、－これが（日本の改革の）最も強き動機であった。殖産興業の考慮は・・後より目覚めてきたのである」。その日本の力強い道徳を宣教師はどう扱ったか。

「我が国におけるキリスト教伝道事業失敗の一原因は、宣教師の大半が我が国の歴史について全然無知なることがある。或る者は言う、「異教徒の記録などに頓着する必要があろうか」とーその結果として彼らの宗教をば、吾人ならびに吾人の祖先が過去数世紀にわたりて継承しきたれる思索の慣習から切り離してしまうのである。・・アメリカ的もしくはイギリス的形式のキリスト教―キリストの恩寵と純粋よりもむしろより多くのアングロ・サクソン的恣意妄想を含むキリスト教―は、武士道の幹に接木するには貧弱なる芽である」（岩波文庫：矢内原忠雄訳。以下のグリフィスの緒言も）。東洋道徳と西洋道徳の力強い融合を夢見た米国人を我々はすでに知っている。

Bushido の再版（1905）に際し、新渡戸の友人グリフィスの文章が同書に収載された。「私は 1870 年に、アメリカのパブリックスクール制度の方法および精神を紹介するため、教育開拓者として日本に招聘せられたのであるが、首府を去って越前の国福井に来たり、純粋なる封建制度が現に行われているのを見たのは、じつに喜ばしい事であった。・・武士道がこの城下町と国とにおいて、すべての上流階級の日常生活における普遍的なる信条および実践を成していることを、私は知った」。「各国民それぞれの「旧約」をもつとの教義は、破壊するためではなく完成するために来たりたまいしキリストの教

えである。日本においても、キリスト教はその外国的な型や包装を解いて、異国品たることを止め、武士道が成長したその土壌の中に深く根を張るであろう。締めつけている紐と外国的制服とを脱ぎ去りて、キリストの教会は大気のごとく国風と化するであろう」。

キリスト教では、世界の全て、全て人類が同じ一つの神により創造されたと説く。その全人類に「キリスト以前」の歴史、旧き契約の時代があった。それは西洋においては遥か千年の古だったが、内村や新渡戸の日本では同時代の現実だった。それは神と人との「新たな契約」を知った後にはただ否定されてしかるべき無意味な時代の姿などではなく、福音を得て完成されるべき道の中間点のはずだった。

グリフィスは福井での生活において、武士が治める古い日本を実体験として知った。庶民の習俗に、悠久の日本の歴史を洞察した。庶民の信仰心に、中世の偉大な宗教者の存在を認識した。武士の高い道徳に、自らの信仰を接ぎ木すべき良質な幹を認めた。グリフィスは旧約の時代の価値を福井で発見した。そして「キリスト以前の日本史」*The Mikado's Empire* を書いた。日本の歴史に根差してこそ、日本のキリスト教は育つであろう。そして世界に貢献する使命を果たすであろう。「受け身の静けさの段階に達していた偉大な宗教」が「不純な淀みと冷たい形式主義を免れるために必要な、改宗の精神を」信仰に目覚めたばかりの国の青年たちによって注入されることは、彼の願い通り、その青年たち自身が抱いたアンビションでもあったことを、人口に膾炙した内村の言葉

が我々に伝えている。“I for Japan, Japan for the World, the World for Christ, and All for God.”

その使命、世界全人類が同じ人類として、同じ一つの世界のために生きて務めを果たす、それが日本人の精神に接ぎ木されるべき、より高い道徳というものであったならば、宣教師を送り出す側の国民が、同じ神の創造による東洋の旧約の民の精神とその歴史を尊重しなければ欺瞞に等しい。グリフィスは来日前からそれを知っていたであろうが、福井での生活は彼に確かな証をもたらし、彼の帰国後の人生全てを日本という存在に緊縛した。彼は同国人に対し、日本人について、日本の歴史について、日本の宗教について、語り続け、書き続けた。文字通り、命尽きるまで。宣教師としては来日しなかったグリフィスは、同胞に対し日本という存在を通じて教えを説く伝道者だった。

グリフィスにとって日本人は非キリスト教徒・異教徒ではなく、未だキリスト教徒ならざる人々だった。同様に、明治初年の日本人は非近代人ではなく、未近代人だった。グリフィスは日本の近代化を援けるために来日し、教師として尽力したが、近代社会こそが人間の魂をいっそう苦しめるものであることを、彼は痛切に知っていた。西洋諸国と同じく、それ以上に急速に近代化の道をひた走る日本を、異教徒であっても西洋と同じ仲間だと彼は国際社会で擁護し続けたが、その道ゆえに彼の愛する日本人は、西洋人以上に苦しむ霊魂の救済を必要とするはずだった。日本にとってのグリフィスは第一に、我々日本人の真の幸福を願う宗教者だった。　　（2021/3/14 開催の講座より）